

留学生のための物語日本史

第 4 話 聖徳太子

「父上、何をされているのでしょうか」

山背大兄王（やましろのおおえのおう）は父である聖徳太子に話しかけた。聖徳太子は、夜遅くまで火をともし一生懸命に何か書き物をしていたのである。

「ふむ、これから海の向こうの大国隋からきた返礼の使者である裴世清（はいせいせい）に持たせてかえす返書をしたためている」

この前年、日本は、小野妹子を使者に隋に対して使者を送った。様々な日本の名産を持たせ、その代り、隋からさまざまな物や先端の文化を得て帰ってくるのである。いわゆる「遣隋使」である。昨年、小野妹子に持たせた手紙には「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙（つつが）無きや」で始まる国書を持たせたのである。これに対して、隋は半分怒り、半分呆れて裴世清を返礼の使者として送ってきたのだ。しかし、その持ってきた書面には「皇帝問倭皇」（「皇帝 倭皇に問ふ」）とある。

「何を悩んでおいでなのですか」

「隋の連中は何を考えているかわからん」

「どういうことでしょうか」

「この日の本の国と隋帝国の間は、文化や技術などの差こそあれ、どちらかがどちらかに属するとか隷従（れいじゅう）するという関係ではない。しかし、何故か相手はこの日の本の国が隷従しているかのような高飛車な態度である。これをいかがいたしたものか」

聖徳太子は頭を悩ませた。

「父上らしくございません」

「父上は、もともと厩（うまや）の前にてお生まれになったとか。そのために厩戸の皇子と
言われていらっしやったと聞きます」

「おうおう、町では母・間人皇女（はしひとのひめみこ）は西方の救世観音菩薩が口から胎内
（たいない）に入り、厩戸をみごもった、などと言われている。もちろん、私が仏寺・仏法を
大事にすることからそのように言われているのであろう。私も生まれたときのことはさすがに
覚えていないが、しかし、仏寺・仏法を重要視するのは、そのようなことが理由ではない」

「はい、心得ております。しかし、その伝説のように、父上には、救世観音菩薩が乗り移っ
ているのではないかと、いつもそのように考えております」

山背大兄王は、自分の父が今までいくつもの難解な事件を易々（やすやす）と解決したこと
を少々誇らしく思っていた。

「いやいや、私の息子までがそのようなことを言っては困る。そもそも、仏法を守るように
なったのは、私の窮地（きゅうち）を仏法が救ってくれたからだ。血縁である蘇我馬子と一緒
に物部守屋を攻めたときのことじゃ」

「父上が戦争に参加されたのですか」

山背大兄王は驚いたように言った。それもそのはずだ。父である聖徳太子は、人の命を大事
にし、殺生（せっしょう）などは無縁の人物と思っていた。

「攻めたといっても、好き好んで戦争をしたわけではない。天皇家をわが意のままにしよう
としたために、物部は、天皇から討伐命令（とうばつめいれい）が出たのだ。臣である者、天
皇陛下の命令であれば仕方があるまい。その命令をこなすことが最も重要なのじゃ。そう、今
この手紙を書くのもその命令なのだが」

聖徳太子は、一瞬、手紙の方に目をやると、ずっと手に持っていた筆をおいて、山背大兄王
の方に向き直った。

「その時、さすがに軍事を扱っていた物部は強かった。私は、ぬるでの木を切って四天王の
像をつくり、戦勝を祈願して、勝利すれば仏塔をつくり仏法を広めることに努める、と誓った

のじゃ。そうしたら次の戦いで物部守屋は弓にあたって死に、討伐戦は終わったのだ。その後、私は仏様との誓いを守り、摂津国難波に施薬院（せやくいん）、療病院（りょうびょういん）、悲田院（ひでんいん）、敬田院（けいでんいん）の四箇院（しこいん）を設置した四天王寺を建立したのだ。何も私に菩薩様が乗り移ったりはしていない」

「父上は、四天王寺だけではなく他にも多くの寺を建立しています。それはなぜでしょうか」

「仏教は人を救う。私もそのようになりたいと願うし、またそのようになれないならば、せめて仏法にすがって日本を救おうと思っている。用明天皇の病気が治ることを願って法隆寺を、その別院として用明天皇から賜った地に斑鳩寺（いかるがでら）を、浅間山の噴火鎮静のための勅願寺（ちよくがんじ）¹として真楽寺（しんらくじ）を。このほかにも、願い事一つに寺を一つ。それが私の祈願した内容だからだ。仏様との約束通りにしている。それだけのことだ」

聖徳太子は、そう言うと、向き直って部屋の片隅にある仏像の方に向かって静かに手を合わせた。

「仏教の隆盛も、父上のこれらのお考えによって、隋と同様かそれ以上になりました」

「それだけではない」

聖徳太子は自分の息子である山背大兄王の方に向き直ると、強い口調で言った。

「今まで大和朝廷は、全てどこかの家柄に頼っていた。例えば、軍事は物部氏、政治は蘇我氏というような形だ。しかし、物部守屋のように、朝廷の大義大恩があるにもかかわらず、天皇を自分の息のかかったものにして政治を思うままにしようとする者も出てくる。そのようなことの無いように、私は広く、そして階級や家柄に関わらず、才能を基準に人材を登用するようにしたのだ」

「推古天皇のもとで行われたものですね。このことによって蘇我氏や物部氏ばかりではなく、大伴氏や秦氏など優秀な一族が出てくるようになりました。これは父上のお考えによるものです。これで朝廷にも優秀な人材が増えました」

¹ 勅願寺…天皇の願いによって建てられた寺院。

「それだけではない。都の人々が、皆やる気になった。多くの人が、自分が活躍できると思うようになり、朝廷全体が活気にあふれている。この人々の気持ちが最も重要なのである。山背。よく覚えておくがよい。人が最も強くあるのは、人々がやる気になり、そして、結束し和を持って一つのことにあたる時である。権力や武力がどんなに勝っていても、人の和の力に勝てるものはない。そのことをよく覚えておかなければならぬぞ」

「はい、父上」

「和を持ってということは、山背、お前にだけではなく広く多くの者に知ってもらおうと思った」

「それで『十七条の憲法』を」

山背大兄王は、やっと父である聖徳太子の意図を理解した。山背大兄王は、『十七条の憲法』の冒頭に『和を持って貴しとなし』と書いてあることを思い出したのであった。

「仏法を読んでも、また中国からきているあらゆる書を読んでも、すべて心構えから書いてある。そうは思わぬか。まずは和を保つこと。これが最も重要である」

「はい」

「豪族たちに臣下としての心構えを示し、天皇に従い、仏法を敬うこと。これがこの日の本が発展する条件である。逆に、その心構えが無くなれば、中国に伝わる昔の王朝のように、次々と王朝が変わってしまい混乱してしまう。国が乱れるということは、その国の民が皆疲れ弱ってしまうということである」

「はい」

「我々は、八百万（やおよろず）の神々から、この日の本の国を治めるように命じられている。治めるとは、当然に、民が安心して暮らし、そして平和に毎日を過ごし、そして、少しずつでも国家が安定し発展することを言うのである。我々は、朝廷と協力し、いや、朝廷に従って、国を治めるための努力を怠ってはならないのである」

山背大兄王は、少し不思議そうな顔で、父である聖徳太子に聞いた。

「父上は、今、八百万の神々とおっしゃいましたが、しかし、十七条の憲法では仏教を信仰することを説いています。これはなぜでしょうか」

「良いところに気付いたね。八百万の神々は、言葉や目に見えるような形で我々に命じることではない。そのため、神々の意思を我々がわかることはほとんどないのだ。そこで、八百万の神々のことを、別な神として祀り、その言葉を残している仏教をそのまま信仰し、豪族臣下も神々の言葉を知ることが重要なのだ。人は何のために生きるのか。そのことを皆が考え、そして平和に国を発展させることが重要なのである」

「では、なぜ、そのように発展し国を治めることもできるのに、隋の書は『皇帝問倭皇』などと書いてきたのでしょうか」

聖徳太子は、山背大兄王の疑問に対し、改めて書見台（しょけんたい）の方に目を移した。

「私が思うところを申し上げてよろしいでしょうか」

「何か考えがあるのか」

「はい」

「申してみよ」

「隋は、日本が仏の教えの加護があり、なおかつ、冠位十二階のように広く優秀な人材を朝廷に集め、国が発展し、そのうえ、その集まった人々が、国を治めることに協力し、そして、和を持ってより大きな力を持つ国になっているということを知らないのではないのでしょうか。いまだに、太古の昔の日の本の国と変わっていないかのように思い、そのために、朝廷に対して失礼な態度を取っているのではないかと、そのように思うのですが」

「なるほど。しかし、隋は大国である。あまり失礼なことを書いてもよろしくない。どうすべきか」

「知らないことを教えるのに、大国も小国もありません。正しいことを書けばよいのではないのでしょうか」

「その通りかもしれぬ」

聖徳太子は、隋の使者裴世清に対して、その返書に「東天皇敬白西皇帝」（「東の天皇 西の皇帝に敬まひて白す）」と書いた。隋が「倭皇」とした箇所を「天皇」と書いて、返したのである。

そして、その返書とともにもう一度小野妹子を大使とし、高向玄理（たかむこのくろまる）、南淵請安（みなぶちのしょうあん）、僧旻（そうみん）ら留学生と共に再び隋へ派遣したのである。

このようにして聖徳太子は、日本の大和朝廷が、しっかりとした政治システムができている国であることを示し、中国の隋帝国と対等な国として、「遣隋使」を始めたのであった。

第5話 中大兄皇子と中臣鎌足

大和国多武峰（とうのみね）の山は、飛鳥板蓋宮（あすかいたぶきのみや）から東に行った「三社神社」の裏にある。そこに、若者が何人か集まって車座（くるまざ）¹になって話していた。

「皇子は、どう思う」

「あまり良いこととは思わない」

皇子と言われた中心に座っている若者は、小枝を指揮棒のように振り回していたが、そのように言うとその枝を遠くに投げた。小枝は回転しながら茂みの向こう側に飛んで行った。

「お前の親戚だろ。どうなんだ」

初めに口を開いた若者は、皇子の隣に座る年長者に声をかけた。

「あっちは本家だからねえ。私の場合、お母さんの家で育てられたから、蘇我というよりは石川の家の方が強いんだよ。だから蘇我の家のことなど全く分からない」

「全く、役に立たないなあ」

「鎌足、年長者にそんなこと言うな。そもそも、君の家柄は神様に祝詞（のりと）を奏上する家柄だろ。しっかりと神様と交信していればこのようなことにはならなかった。違うか」

「皇子のおっしゃる通りですが」

始め威勢が良かった鎌足は、急に静かになってしまった。

「古来、天皇家の後継問題や血筋に口を出す臣下は許されないと決まっている。その昔、用明天皇の頃、穴穂部皇子（あなほべのおうじ）は豊御食炊屋姫（とよみけかしきやひめ）（敏達天皇（びだつてんのう）の皇后）を犯そうと欲して殯宮（もがりのみや）²に押し入ろうとしたが、

¹ 車座…多くの人が輪のように内側を向いて並んで座ること。

² 殯宮…天皇・皇族の死体を葬送まで安置しておくところ。

三輪逆(みわのさかう)に阻まれた。怨んだ穴穂部皇子が守屋に命じて三輪逆を殺させた事で、蘇我氏と物部氏が対立した。用明天皇崩御の後、皇位を巡って争いになり、守屋は穴穂部皇子を強引に推薦した。蘇我馬子は、豊御食炊屋姫の詔を得て、守屋が推す穴穂部皇子を誅殺(ちゅうさつ)し、諸豪族、諸皇子を集めて守屋討伐をした。それ以前も、景行天皇の頃、その息子大碓命(おおすのみこ)は、景行天皇の后を横取りするなどの暴行で廢嫡(はいちやく)されており、それに連なる豪族をすべて排除している。何か違うか」

「皇子は天皇家のことを調べて博学ですから、それに間違いはないと思います」

蘇我石川麻呂がすかさず口を開いた。ふと中臣鎌足は、何気なく空を見上げた。今まで青天であったのに、にわかには雲が出てきていた。

「皇子、雨が来そうですよ」

「天は何でも知っている」

雨に備えて立ち上がった時、中大兄皇子は天を見上げて言った。

「今から三年前の夏、覚えておろうか。長きの日照りが続いたため、蘇我蝦夷は百濟大寺に菩薩像と四天王像を祀り多くの僧侶に読経させ焼香させた。しかし、翌日申し訳程度に雨が降って終わってしまった。その翌日に天皇が四方を拝して雨を祈ったら、たちまち雷雨となり、五日間続いたではないか。蘇我蝦夷、入鹿には、八百万の神々が国を治めることを望んでいないということだ」

そばでずっと聞いていた佐伯子麻呂(さえきのこまる)と葛城稚犬養網田(かつらぎのわかいぬかいのあみた)は深くうなずいていた。

もともとは、神祇官(しんぎかん)である中臣鎌足が、蘇我氏の専横³を嘆いたことに始まる。数年前までは、聖徳太子、そして山背大兄王の上宮王家が政治の中心であった。しかし、聡明で人気もある山背大兄王では政治が自由にならないと思ったのか、蘇我入鹿は山背大兄王とその家族全てを殺してしまったのである。人々は、権力と恐怖で蘇我家に出入りするよう

³ 専横…好き勝手にふるまうこと。

なったのだ。天皇家は、神祇を行っているにもかかわらず諸侯が集まらないという危機的状況が生まれた。

山背王兄王を殺し、朝廷を専横する蘇我氏に対して怒りを持った中臣鎌足は、南淵請安の私塾で周孔の教えを学ぶ仲間である中大兄皇子を誘い、蘇我氏を滅ぼすことを企画するのである。その後、蘇我一族であるが傍流（ぼうりゅう）のため蘇我蝦夷・入鹿親子と仲の悪い蘇我倉山田石川麻呂、そして佐伯子麻呂と葛城稚犬養網田を仲間に引き入れたのである。

「明日決行する。明日、三韓から進貢（しんこう）⁴の使者が板蓋宮に来る。当然に大臣の入鹿も出席する。ここで入鹿を殺す」

中大兄皇子は、刀を二振り持つと佐伯子麻呂と葛城稚犬養網田に渡した。

「明日、歓迎の奏上を石川麻呂がする。奏上している間に、入鹿を殺せ。我々も加勢する」

「あい分かった」

二人は強くうなずいた。

はたして翌日。朝廷には新羅、百済、高句麗の使者が入った。入鹿は猜疑心⁵が強いために決して剣を手放さなかったが、この日は案内人がうまく言って剣を外させた。

外には、入鹿の軍隊がいたため、何かあれば入ってくる可能性があった。何しろ朝廷にいるのは入鹿だけであり、蝦夷は自分の館にいるのである。中大兄皇子は「使者に失礼があるといけない」として、朝廷の門を閉めさせた。

石川麻呂は表文を奏上するが、これから起きることを知っているためにどうしても手が震え汗が出てきた。

「なぜ震えているのか」

入鹿は、不審に思って石川麻呂に聞いた。

「天皇のお近くが畏れ多く、汗が出るのです」

⁴ 進貢…みつぎ物を献上すること。

⁵ 猜疑心…うたがったりねたんだりする気持ち。

石川麻呂はそう答えるのがやっとなのであった。中大兄皇子は、その姿を見て、自分と鎌足以外は緊張して動けないと察すると、中大兄皇子自身が躍り出て、入鹿を切り伏せた。

「私に何の罪があるのか。この不届き者をお裁き下さい」

入鹿は目の前に座る皇極天皇の方に倒れこみながら言った。

「何を言う。皇族を殺し皇位を奪おうとした神をも恐れぬ無礼者が。この中大兄皇子が成敗してくれる」

中大兄皇子は、そう言うが入鹿を切り殺した。皇極天皇はそれを見るまでもなく、殿中に引き下がってしまった。

蘇我氏に何かあるときは、皇極天皇の雨乞い以来いつも雨が降る。この日も大雨が降り、朝廷の庭は水浸しになっていた。入鹿の死体はその庭に投げ捨てられ、障子で覆（おお）いかけられたのである。

入鹿が殺されるという報せは、すぐに蝦夷にも伝わった。蝦夷は、すぐに帰化人の漢直（あやのあた）の一族を集め警備を固めた。一方中大兄皇子は、直ちに法興寺へ入り戦備を固め、諸皇子、諸豪族はこれに従った。

「どうする」

石川麻呂が言った。

「軍を率いて取り囲みましょう」

中大兄皇子は石川麻呂を総大将にして蝦夷の屋敷を取り囲んだ。

「皇子、誰も戦いは望んでいません。一度説得してみてもいかがでしょうか」

中臣鎌足は巨勢徳陀（こせのとこた）を派遣して説得し、蝦夷の群集は全て逃げてしまった。もう戦うことができなくなった蘇我蝦夷は、翌日、やはり朝からの大雨の降る中、館に火を放ち、自害して果てたのである。ここに、蘇我本宗家は滅びた。

「やりましたね」

「いや、本当はこれからだ。今までは朝廷を専横していた者を排除したに過ぎない」

「はい」

「臣下国民は、天皇であっても蘇我であっても構わない。最もよい政治を行う人物が上にいればよいのだ。南淵先生もそのように申し立てたはずだ。これから朝廷が良い政治を行い、そして、臣下国民が蘇我がいなくなってよかったと思うような政治を行うことこそ、最も重要ではないか」

「そのためには、皇子が天皇になられるのがもっとも良いかと。皇極天皇は、蘇我氏の専横を許したことで、退位なされると申しております」

蘇我石川麻呂はそのように言った。

「それは違う。私が天皇になりたいから蘇我氏を滅ぼしたように思う。そのようなものではない。ここは軽皇子（かるのみこ）に天皇に即位してもらい、私は、昔の聖徳太子のように陰で支えるのが良いかと思う」

軽皇子は天皇に即位し後の孝徳天皇となった。安倍内麻呂が左大臣に蘇我石川麻呂が右大臣に、内臣として中臣鎌足が就任した。

孝徳天皇と中大兄皇子は群臣を大槻の樹に集めて「帝道は唯一である」「暴逆は誅した。これより後は君に二政なし、臣に二朝なし」と神々に誓った。そして、大化元年と初めて元号を定めたのである。その後、それまでの飛鳥の豪族のしがらみを断ち切るため、そして、新しい天皇が、血で汚れた土地で、新しい政治を行うことを嫌い、孝徳天皇は、飛鳥板蓋宮から摂津の難波長柄豊碕宮（なにわのながらとよさきのみや）へ遷都したのである。

中大兄皇子は、その後、どのような政治をするかを示すために、孝徳天皇の名で「改新の詔（みことのり）」を發表したのである。

その中でそれまでの豪族の私地私民をなくし、公地公民制とした。その公地を公民に貸し与え、そこから租・庸・調といわれる税金や労役を収奪する方式に変えた。

このほかにも、それまでの貴族制のような大臣・大連を廃止し、聖徳太子の作った冠位十二階の中に、全てを組み込み、天皇を中心にした中央集権国家を作り上げた。

また、礼法や衣服に関しても定め、官位や役職に応じて服の色なども決められた。一般の領民は白い装束を着るようにされている。なお、これは現在でも皇居の正式な儀式に参加する際や、あるいは神社の神職などに、この色に関することが残されている。

天皇親政になり、次々と改革を断行した中大兄皇子は、久しぶりに飛鳥に帰ってきた。そばには、盟友である中臣鎌足がいた。あの時のように昔の飛鳥板蓋宮の東方の山の上の見晴らしの良いところの少し開けた場所で、二人は地面にそのまま腰を下ろした。

「あの時はどうなるかと思ったよ」

「子麻呂なんか、震えて何もできなかったからなあ」

二人は笑いながら言った。

「しかし、どうだ。蘇我入鹿が政治を専横していた時より、臣下国民は生き活きとしているのではないか」

「それは皇子の活躍、大化の改新の効果でしょう」

中大兄皇子は、あの時のように小枝を投げると、立ち上がった。今日は雨もなく、青天のまま暖かい風が吹いていた。

「鎌足」

「はい」

「中臣家は、神様を拝む仕事であったが、実際、今もやっているのか」

「もちろん。政治も神祇も一緒にやっている」

「この改革がうまくいった。鎌足は、神祇よりも政治の方があっている気がする。でも、中臣家ではいつまでも神祇の家という感じになってしまうではないか」

「まあ、そうですが」

鎌足は、中大兄皇子が何を言い始めたか全くわからなかった。

「鎌足、今日から藤原と名乗れ。そして大織冠（たいしょくかん）⁶の位を授ける」

⁶ 大織冠…大化の改新後定められた冠位制の最高位。授けられたのは藤原鎌足のみ。

「十二階ではなく、その上の十三階か」

鎌足は笑った。

「そうだ。私も、鎌足に大織冠を与えることで、聖徳太子をやっと越えられる。十二階が十三階になるのだ。どうだ受けてくれるか」

「まあ、皇子がそう言い始めたら聞かないからな。受けてやる。その代りひとつ条件がある」

「なんだ」

今度は中大兄皇子が怪訝（けげん）な顔をした。

「もういいだろう。天皇になってくれ。今の藤原の姓と大織冠は、皇子が天皇に即位したら正式にもらうことにする」

「なんだと」

中大兄皇子と中臣鎌足は、少し顔を見合わせると、肩を組んで大声で笑った。

中大兄皇子は、のちに天皇に即位して天智天皇となる。中臣鎌足は、死ぬまで天智天皇のよき理解者で相談役となり、その子不比等が大寶律令を作り長きにわたる朝廷の基礎を作ったのである。そして、その子孫は奈良平安から明治、そして今日まで「公家」として、天皇の政治や公務を補佐する役目をしているのである。

なお、二人は、二人で話をしたこの山を「談い山（かたらいやま）」「談所ヶ森」と呼んで、何かあればここで様々なことを語った。そこが現在「談山神社（たんざんじんじゃ）」となっている。